

---

太王四神記      サリヤン×子キハ小説      『新・ある日の日常』

るき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

太王四神記      サリヤン×子キハ小説   『新・ある日の日常』

### 【Nコード】

N4169I

### 【作者名】 るき

### 【あらすじ】

誘拐・記憶を消されたキハがアブルランサで生活するようになって4年。サリヤンから武術を教えてもらっていたキハだが、ある日、基礎の卒業試験を受ける事に。キハとサリヤンの闘いが始まる!?

..... + 「人物紹介」つき。

(前書き)

〓〓「新・ある日の日常」の登場人物紹介〓〓

【キハ】……………本作小説の主人公。

9歳。虎族の火の巫女・カジンおよび朱雀の転生。火天会に誘拐され、5歳より前の記憶がない。

【サリヤン】

年齢不詳、推定19歳。火天会戦闘部隊・隊長、就任4年目。大長老の側近、及び、キハの側近。剣の名手。

今回に限り、コメディ。いつもとはまったく違う雰囲気です。その時代には絶対ないだろと思う物も登場しますが笑ってお見逃し下さい。

キ八が火天会ひあちよんかいに来てから4年の月日が流れた。

【アブルランサ：武術訓練所】

「ねえ、サリヤン」

「話してはいけません。雑念を払い、精神を集中させ行つて下さい」

キ八はサリヤンが用意した武術訓練道具を使い、武術を習っていた。

朝起きてから昼まで学問を習い、昼から夕方まで武術の稽古がキ八の日課だった。

武術、と言っても基礎、基本的な事ばかりでいまだ本格的な事は教えてもらってはいなかった。

それでも言われた通り黙々とやってきたキ八だが、とうとうキレてしまった。

「あゝもう、やめたっ！！！！」

「キ八様」

「毎日こんなばかりじゃいい加減飽きるわよ！！いつになったら基礎を卒業出来て、新しい事を教えてもらえるの！！？」

ムスツとしてその場に座り込んだ。

すねたキ八を見かねてサリヤンは用意していたお茶を差し出した。

「少し休憩しましょうか」

「今日はもうやらないっ！！明日もしないから！！基礎しか教えて

くれないなら武術の稽古なんて一生しないわ!!!」

「キ八様、どうかお怒りにならないで下さい。基礎はとても大事な事です。どんなに優れた技でも基礎なくして習得する事は出来ません。基礎を飛ばし、未熟なまま技を行えば、戦場で命を落とす事になります」

「へへ、サリヤンは火天会にとって大事な大事なこの私を戦いくさに出すんだア？」

「そうは言ってはおりません、キ八様。そういう意味ではなく……」

「戦場？命を落とす？だから、何!!!サリヤンなんて大っ嫌い!!!」

「キ八様……」

「私は本格的な事を習いたいので!!」

「フンっ!」

お互い終始黙り。

その長い沈黙を破ったのはサリヤンだった。

真剣な表情だったサリヤンの顔が優しく微笑んだ。

片目でちらりとそれを見たキ八は。

(……………うう……………、そんな顔するなんて反則……………ずるい)

サリヤンの笑顔に弱かった。

「合格です、キ八様」

「……………」

「基礎はすでに完璧に習得なさっています。私はキ八様のそのお言葉を待っていました」

「……………じゃあ、教えてくれるの？本当に？」

「はい。ただし、基礎の卒業として試験を行います。どんな形でも構いません。私から一本取って下さい」

「いつでもいいの？」

「もちろんです。遠慮はいりません。本気でかかって来て下さい。」

その間の学問・武術は自習としましょう」  
「わかったわ」

【アブルランサ：各部隊隊長・副隊長クラス専用食堂】

火天会といえど人間。

隊員同士普通に会話もするし、何か大きな事（どんな悪事だよ！）をやった後は打ち上げで酒を飲み交わしたりもする。

そんなこんなでこの食堂もある程度賑やかなのだが。

この日の夕食は火を消したように静まり返っていた。

ちなみに隣の部屋の一般隊員専用食堂までもこの部屋の静かさに異常を察し、静かだった。

「……………あ、あの〜サリヤン様……………？」

サリヤンの隣に座っていた弓部隊の隊長が恐る恐るサリヤンに話しかけた。

「さつきから……………その……………、キ八様が……………」

その態度は火天会の一隊員とは思えない程とてもオドオドしていた。

それもそのはず。

まだ幼い9つの女の子といえ、キ八は火天会が崇める火の巫女。

あの大長老と同じぐらい位が高い人物である。

サリヤンの傍の上座に座っていたそのキ八が。

もの凄い殺気を放っていた。

サリヤンは食事の手を止めた。

「キ八様」

「なに……………」

女の子のキ八の声とは思えない程のドスのきいた声だった。それと同時に隊員全員が固まる。

「まずは気を消してみるのがよろしいかと」

「わ、わかってるわよ!!」

再びサリヤンの食事の手が動く。

全隊員「……………」

全隊員（……………さ…触らぬ神に、祟りなし）

しゅん。

その場に居合わせた隊員は二人から視線を逸らし、背筋を凍らせ、恐怖に震えながら黙々と食事をした。

翌日、胃痛で訓練を休んだ者が居た事は言うまでもない。

【アブルランサ：会議室】

大長老はサリヤンから渡された密書を目に通していた。

「なるほど。チュシンの星が浮かんだあの日に同じくして王宮に生まれた男子、名はヨン・ホゲだったな。高句麗の王として教育されている、と」

「はい。それだけでなく、チュシンの王としても」

「この密書によれば、王族の者でもう一人同じ日・同じ時刻に生ま

れた男子がいるそうだ。その者は現高句麗の王であるソスリムの弟のお子。王家の血が流れているのであればあるいは」

「ソスリム崩御の後、玉座に座るのはその弟。何事もなければその後は生まれたその者の子が玉座に就きます。自分自身ならまだしも、子に玉座を継がせる事を望まない親がいるでしょうか。遠く離れた地で隠れるように暮らしているのは怪しいかと」

「能ある鷹は爪を隠す、か」

「はい。何か匂うものが。その者がチュシンの王なのでは？」

「それを知るのはかつてチュシンの王に仕えた四神のみ。直接会えば朱雀の神器が反応を見せるだろう」

キハは物陰に隠れて遠くにサリヤンと大長老を監視していた。

(一体、何を話しているのかしら……?)

この会議室はとにかく広い。

二人からかなり離れた所からの監視で、その会話は聞こえなかった。

(ま、話の内容なんてどうでもいいわ。大長老と話している今ならいけるかもっ)

キハはサリヤンに向けて持っていた手裏剣を投げた。

「引き続きクンネ城を監視せよ。くれぐれも我々の存在を悟られぬように」

「は。かしこまり」

ヒュッ。ドスッ。

サリヤンは瞬時に避け、手裏剣は二人の間を通り抜けて壁に突き刺さった。

(ちっ……………、外したっ！)

大長老はゆるりと手裏剣が飛んできた方に視線を向ける。

「キ八様ですか？盗み聞き、とはよくありませんな」

(別に盗み聞きじゃないし……………！)

キ八は物陰から出て姿を現す。

「安心してちょうだい。こんな所からじゃ何も聞こえていないから」

キ八は諦めて部屋を後にし、サリヤンは大長老に頭を下げた。

「申し訳ございません、大長老様。実はキ八様に武術の試験を出してしまして。私から一本取るようにと」

「そうか。実にご立派に成長なされた」

「はい。何事も覚えが早く、私も感心しております」

「キ八様は我々にとって、とてもよい“道具”になるぞ」

「ふははは、フハハハハハハハハハハハハハハ」

“道具”という言葉にサリヤンの胸に自分でも分からない何かがかかってくる。

広い会議室に大長老の笑い声だけが不気味に響いた。

【アブルランサ：お手洗い所】

キ八はサリヤンの後をこっそりつけた。

しかし。

「……………」

それを示す看板を見上げる。

( いくらなんでも、 )

「……………」

( “ここ” はまずいわよね……………？ )

想像してはいけない何かを想像しそうになり、それを振り払った。

「もういいわ。戻ろっつと」

キハは踵かかとを返す。

振り向いた先に居た別の隊員と目がバチリと合った。

なぜキハ様がこんな所に？みたいな隊員の物言いたげな目をあえて無視し、キハはそそくさと私室に戻った。

ホーホー、ホーホー ( byふくろう )

【 アブルランサ：サリヤン書斎兼寝室 】

夜。

サリヤンは明かりを灯して山積みになった仕事をしている。

その姿をキハは外から監視をしていた。

( 狙うは“寝込み”……………！卑怯じゃないわよ？だっていつでも  
いって言ったもの )



キハはサリヤンの前に姿を現した。

「なぐんだ、徹夜なんだ。せつかく寝込みを襲おうと思ったのに」「それは残念でした。またの機会に、いつでもどうぞ」

キハは部屋に入り、卓に座った。  
向かいにサリヤンも座る。

（　　） ツハ。私とした事が！うっかり一時休戦って言葉を鵜呑みにしてノコノコと入ってきちゃった！油断させて試しているんだわ、きつと！）

「……………」  
「……………」

キハ、サリヤンは茶をすする。

「　　」  
キハ様」

「な、何？」

「先ほど申しましたでしょ。一時休戦、と」

「……………。これって試験？　　」ゴホッ

あ、あちっ！」

「そんな勢いよく飲むと火傷します。今日はもう試験の事は忘れてゆっくりお休み下さい。お疲れになりましたでしょ？」

（疲れてなんかいないわ！まだまだいけるわよ！疲れてなんか……………っ……………！）

玉砕。

(……………疲れた)

「あなたの言うとおり、一時休戦にしてあげる。明日の為に身体を休めておかないとね」

「それがよろしいかと思えます。あ、それは西洋の菓子です。天に昇るほど美味だと耳にしたので手に入れました」

パク。モグモグ。

「どうです？」

「……………おいしいっ！！こんなおいしいモノは初めてだわ！！」  
「お喜びいただけでよかった」

菓子を食べ。  
茶を飲み。

(……………そういえば今、何時？……………眠い……………)

「ねえ……………、サリヤン。ここで寝てもいい？サリヤンは徹夜だから寝台、空いているわよね？」

「構いませんよ、どうぞ」

フラフラフラ、キハは歩き  
バフっ！、思いっきり寝台にダイブ。

キハはそのまま眠りに落ちた。

「おやすみなさいませ」

サリヤンはそつとキハに布団を掛けた。

こうしてキハの戦いは何日も続いた。

【 アブルランサ：隊長専用大浴場 】

湯船から白い煙がもくもくと立ち込める。

朱雀や炎をイメージした様々な彫刻が施された大理石仕様の超豪華なお風呂。

それは隊長代々受け継がれるものだった。

サリヤン一人にこんな豪華で広い風呂が与えられているのは無駄に勿体ないのでは？

まあ、そこは隊長の特権なのだから仕方がない。

.....  
.....

そういえばキハ専用の風呂も広くて豪華である。

ま、いいのさ。

火天会の中で唯一の女の子だし、何より火の巫女だから。

キハは物陰に隠れ、サリヤンを監視する。

それにしても我ながら上手い事忍び込めたものだ。

隊長専用大浴場は一般隊員大浴場よりも奥にある。

ここに来る途中、何人も隊員とすれ違い、変な目で見られたがそんな事は気にしない。

(……サリヤン、こんな時でもなかなか隙を見せないのね)  
もうかれこれ30分ぐらい経っただろうか。

とうのサリヤンは一行に動く気配がない。  
湯船につきり、目を閉じて眠っているように見えたが実はそうではない。

隊長として色々悩む事があるのだろう、あれは考え事をしているのだ。

サリヤンの風呂が長いのは珍しくはなかった。

(う~~~~、あついで……………っ……………)

暑い、とにかく暑い。

よくもまあ、サリヤンはこんな所にいられるものだ、不覚にも「さすが!」と感心してしまった。

ピチャ　ン。

天井から湯船に雫が落ちる。

その音に誘われるようにして目を開けたサリヤンに、隙が生まれた。

「隙ありっ!……………!」

「……………」

ヒュッ。

キハは持っていた手裏剣を投げた。

サリヤンは反射的に傍にあった桶を掴み、それを手裏剣に向けて投げた。

ヒュツ！バシツ！ガシャ　ン！

手裏剣は的を変え、サリヤンに届く事なく、あっけなく落下した。だが桶は。

そのままキ八に向かって飛んでいった。

「　しまった……………！」

サリヤンはやり過ぎたと後悔したが、それを止める術すべはもはやなかった。

（ええ！！？ちよつと、嘘でしょ！！？）

キ八は寸でのとこで避ける事に成功し、桶は壁にぶち当たり派手な音をさせながら床を転がった。避けたはいいが。

「きゃっ……………！！！」

つるん。ドテン。

キ八は滑って転んでしまった。

「痛、痛たたたたっ」

「キ、キ八様……………っ！！！！大事ありませんか！！！！！」

ザバ　ン。

サリヤンは湯船から上がり、キ八の元に駆け寄ろうとした。その時。

はらり。

腰に巻いていた布が落ちた。

キハ「.....」サリヤン「.....」

「.....」

「き.....きやあああああああ.....」

「!!」

キハの悲鳴がアブルランサを揺らし、

火天会隊員「ぢ、地震か.....!!!?」

暑さでのぼせたキハはそのまま意識を失った。

【アブルランサ：キハの私室】

ひんやり。

額に冷たい何かが乗せられた。

(.....あゝ、気持ちいいイ.....)

このまま、この心地よさに眠ってしまいたいくらいだ。  
だがどうやら、そうさせてはもらえなさそうだ。

「ま　　八さま　　、キ八様」  
「！」

キ八は目を開ける。

額には冷たい水で濡らした布が乗っていた。

「お気付きになられましたか、よかった」

「サリヤン……………、う」

身体を起こそうとしたが無理だった。

（　　頭が……………くらくらするっ）

「いくら試験の為とはいえ、あのような場所に長時間居るからですよ」

「だって……………」

「これに懲りたなら今日は大人しく横になっていて下さい。無理はなさらずに。今、冷たいお茶を淹れますので」

サリヤンはキ八に背を向け、お茶の準備をする。

その手が、ピタリと止まった。

「隙あり、私の勝ちね」

サリヤンの首に短剣の切っ先があった。

「私の負けです。参りました、キ八様」

「あなたから一本取ったんだから約束通り武術の稽古、お願いよ」

キハは短剣を下ろし、サリヤンは振り向いた。

「もちろんです。では、さっそく明日から……………」

サリヤンの目線の先のキハはよろけ、倒れようとした。

「キハ様!!!」

サリヤンはとつさに腕を伸ばし、キハの身体を支えた。

「だから無理をなさらずにと言ったのに……………」

「だ、だって……………」

「とにかく、寝台の方へ。今度は本当に頼みますよ」

「……………」  
「ごめん、なさい」

キハはサリヤンに支えられながら寝台の脇に座った。

「お茶をお飲みになって下さい」

「ありがとう」

キハは冷たいお茶を喉に通し、横になった。

(サリヤンの腕……………あんなに遅しかったなんて、知らなかった……………)

他愛もない会話を交わし、夜は更けていった。

翌日。

【 アブルランサ：武術訓練所 】

「おはようございます、キ八様。そういえば言っておりませんでした。昨日は申し訳ございません」

「?????.....なにを????」

のぼせた為か、キ八は風呂でのあの出来事は覚えてはいなかった。

こうして火天会でのキ八の平和な生活が過ぎていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4169i/>

---

太王四神記 サリャン×子キ八小説 『新・ある日の日常』

2010年10月10日03時05分発行